

---

# 眠々

Kuruma

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

眠々

### 【Nコード】

N3010M

### 【作者名】

Kuruma

### 【あらすじ】

主人公である私と、怪物であり、存在のない彼女。そしてそれを巡る人々の、ファンタジックな物語。

テンションは低め。

## 私と姫と怪物と

彼女とは、私の空想の存在である。

彼女は、私の嫌うものを好み、私の好むものを嫌った。

彼女は、好んで憂いに棲みつき、その魂を喰った。

彼女は、喰った。

喰って、喰って、喰って…

ついに彼女は、私の空想から、現実の存在へ。

彼女は、変体した。

\*\*\*

「夢のようだ、美しい」

ある朝である。

父の部屋まで招かれた娘は、金と宝石に着飾っていた。

「身に余るお言葉」

細く響かない、消え入りそうな声。その目は青く淡く、病ゆえの白髪が銀に光り、その身は一層はかなげな姿に映る。

その淡さと正反対の金、銀、宝石のドレス。

今日はこの姫の結婚式であった。

「急に決まった婚約だが、あちらの方も私も皆お前たちの結婚を祝つておるのだ」

「…はい」

「あちらには失礼のないように」

「…わかつております」

「お前のように先の短い娘、貰ってくれるだけありがたいのだ。存分に尽くせ」

「…はい。お父様」

姫の目はまっすぐ父王の姿をとらえていた。

父は笑顔を崩さない。口角が歪んでいるのにも気付かず。

しかし、彼女は変わらず父を見ていた。父の言葉を信じているわけではない。最初から謀られた婚約ということは分かっていたからだ。

「さあまだ時間もある。去る前の挨拶でも何でも構わない、自由に時間を使うといい」

父の残る良心のかけらが娘を労る。

姫は一礼し、自室へ下がった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3010m/>

---

眠々

2010年12月11日00時28分発行